


(様式 14)

指導教員 承認印	主	副	副
			

学位（博士）論文の和文要旨

論文提出者	氏名 小原 重信 
所 属	有限会社 プロジェクト・リサーチ
論文題目	P 2 M理論と実践の統合開発に関する研究 －変革事業志向の日本型プログラムマネジメント論理体系化－
<p>論文要旨（2000 字程度）</p> <p>日本企業は、オイルショック、円高、金融危機などの危機に直面した。好業績企業は「仕組みづくり」の知行合一行動を適用して、独自の変革事業による実績が注目される。この方式こそ歴史、文化、社会風土に根ざした知性の統合と行動の協働である。その顕著な成果は、欧米のプロジェクトとプログラムマネジメントが導入される以前の実績である。その用語がエンジニアリング産業により紹介され 40~50 年の経過に過ぎない。P2M は Project Management を包括した Program Management の呼称であるが、欧米版とは機構と解釈には相違がある。P2M も 2001 年に開発されて内外に知られるが、実績と論理を統合して明確に形式化すれば、さらにグローバルに普及される。第 1 章では、戦後の 1950~60 年代の復興期から現代に至る危機における実績から解説する。欧米流の戦略と実行の文脈も導入して、P2M の成果と本質に言及する。第 2 章では、その中核は、同化、適応、開発の技術取引の進化過程であり、パートナーシップ間で発生する不安定な環境で発揮されるメカニズムである。第 3 章では欧米ガイドの調査分析に触れるが、その編成原理はカーネルモデルによる「知の創造」であることを突き止める。米国版では知識、欧州版では能力重視であり、社会風土と歴史背景や適用ドメインの違いにも触れる。第 4 章では知の独創解釈を直観して、創業から成長した中小企業におけるコア知性とコア技術の融合によるニッチソリューションに着目する。欧米ではプログラム活動を、大規模で複雑な事業開発に適用するが、日本版は、逆転の発想で創造的な統合知を探求した方式にエッセンスを求めている。その英知形式化の全体フレームワークの考案に向けて、メタ認識論による統合、知識、方法、技法の分散知識を収集し、学際的な知識クラスターに識別した、知の統合と組織の協働</p>	

の統合の機構の形式化に成功した。そして、第4章と5では「統合の原則」から P2M 機構と知識範囲、創造的統合マネジメントの論理体系化を完結した。第6章では東京農工大学院で、社会難題とされる環境ビジネス創造の海外留学生科目と化学プログラムマネジメントに挑戦し、大学院学生に職場提案や学会論文の投稿などで高い動機づけを確認した。第7章、8章はエンジニアリング産業の高度化で課題となってきたリスクマネジメントの実態調査とフロントエンド型方式の定量比較分析を行い P2M 理論の妥当性を確認した。第9章、10章ではサービス型製造業における事例研究による例証である。本論の目的は日本版 P2M の新たな変革事業における有効性発信と大学院における学際アプローチにおける教材参考文献に照準を当てている。